

## 35色のパレット

いま、母親への熱いメッセージ

I・II・各二二〇〇円

フレールベル館



子育てが危い、と、いわれている。こ

のままでは、次の世代が不安だという人もいる。母親が、子供に手をかけすぎると非難され、また、かけなすぎると非難される。他人の子育てが気になる。人は一体、どんな風に子供に接しているのか、情報がほしくなる。得た情報と自分のやり方に差を見つけると、あわてて、修正してゆく。そして、子供はひとつのパターンの中に生きることを、しいられてゆく。……現代、子供の生き方事情。

「35色のパレット」の中で、35人の各界の著名人は、母親を回想したり、子育て論を展開してゆく。登場する35人は、今の母親が、子供に望む平凡なしあわせの枠の中におさまり切れない人ばかりだ。ある時は、母親をヒヤヒヤさせ、ある時は不安にさせた人なのではないかと思う。

もし仮に、彼らが、今の母親に育てられたら、非行に走ったり、手のつけられ

ない子供と評されるのではないか。

それだけ、エネルギーがあり、個性の強い人達ばかりである。彼らの子育て論は、ともかく、母親の回想を読むと、そこに、ある種の共通した母親像を読み取ることができる。たくましく、イキイキとし、働きの者で、子供の個性の芽をつむことなく、おおらかに子供の成長を見る母親である。たとえ、貧しさのため、子供に十分接することができなかったとしても、子供と母親の強いきずなが感じられる。そして、著者たちが、自分の母親の姿を、はっきりと思い出し、なつかしんでいる。

きっと、それぞれの母親に会ったら、なるほど、この人を育てた親だと、うなずける人達に違いない。母親自身、かなり個性を持った人のようである。

この本を読むと、それぞれの母親に、会いたくなってくる。35人の個性をばぐくんだ母親に……。